

特集 子どものかくれた力①

— かげの声 評価の裏側を探る

子どもたちの意見

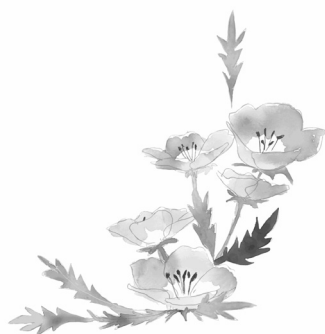
お母さん

ぼくたちの言い分も聞いて！

— 小学六年生の作文より

「毎日の生活の中で、お父さんやお母さんにもっとわかってほしいと思うことや、いいことを自由に書いてもらいたい。」と、墨田区立両国小学校の六年生に作文を書いてもらったところ、できました。たくさんの「注文」が。

中には子どもの身勝手、と思う節がなきにしもあらずですが、お読みください。



もう、自分でできます！

男子

朝、学校へ行く時に、自分できめた時間にやることをやるのに、お母さんは、はやく歯をみがきなさいとか、はやくふくにきがえなさいとか、うるさい。それで、ぼくが、

「自分できめた時間があるから自分でやるよ。」

と言っても、なかなかお母さんは、言うのをやめてくれない。だから、いつもいつも、同じことをくりかえし言っている。だから、もう自分でできるんだから、なにも言わないでほしい。

それから、学校から帰ってきて、きがえないでおやつを食べていると、きがえてから食べないさいと言う。でも、ぼくは、おなががすいているから、言われてもおやつを食べている。お母さんがよこから言うとおいしいものをせっかくだ食べていても、おいしくなくなる。だから、せっかくだおいしいおやつを食べている時に、よこから何も言わないでほしい。

兄は国王じゃありません

女子

わたしは、兄とわたしの二人きょうだいです。わたしの母は、兄のことばかりかまいます。どんなことかというとき、母は、兄がなんかほしいというとき、だめだめといいながら、いつも買ってあげてしまいます。それから、兄のへやばかり母はそうじをします。

どうしておにいちゃんのへやばかりそうじをするのと聞くと、母は、おにいちゃんのへやはとてもちらかつていて、とても見えていられないの、とか、わたしに、あなたは女の子だから自分でやりなさい、といつもにげてしまいます。

それから、なんでおにいちゃんばっかりいろいろなものを買ってあげるの、と聞くと、母は、そんなことはないわよといって、いつもそっぽをむいてしまいます。

わたしが母にいいことは、わたしと兄とを、同じようにあつかってほしい、ということ。そして、兄はどこかの国の国王でもなんでもないふつうの人なんだから、へやのそうじぐらい、兄が一人でやればよいと思います。

私は私なりに努力しています

女子

わたしはよく、手伝いをしないと、手伝いをしてもまじめにやらないとかでおこられる。母は、一日遊んできたのだから、手伝うのはあたりまえという。でも、わたしは、お手伝いはちゃんとやっている。それが、父や母には、ふざけてやっているようにみえるのだ。わたしは、遊んで帰ってきて、つい手伝いを忘れてしまうが、やることはちゃんとやっているのだ。

それから、気がきかないと言われるが、気がきかないのではなくて、何かやろうと思っても、わすれてしまうのだ。いくら気がきかないといつても、わたしはわたしなりに努力しているのだ。それを、ちよつとしたことで気がきかないというのはやめてもらいたい。



中学生になったら

女子

このあいだ、私と母でちよつともめぐりごとをおこした。それは、私が母に、中学に入ったらバイオリンを習わせて、と言った。母は、あんなキーキー音がするものやめなさい。それに月謝も高いんでしよう、と言った。私は、別に専門にやりたいわけではないのだけれど、しゅみみたいなものとしてやりたいのだ。

母は、家にピアノがあるので、ピアノならいいと、半分まではゆるしてくれる。でも、私は、ピアノは低学年のころ少しやっていたので、ほかのものをやりたいのだ。なんとか、習わせてほしいと思う。めいわくはかけないから。

それにもう一つ。私には、姉と妹と弟がいる。姉はもう大きいし、弟は小さくて何もできない。問題は、私と妹だ。私は、四年の頃から、買物はあまり好きではなかったのだけれども、毎日のように行っていた。今もそうだ。私ももう中学なので、手伝わなければいけないのだけれど、妹ももう五年になるので、バトンタッチをしてもらいたい。

母は、妹のことをまだ小さいからという。その甘やかすのが、いけないことだと思ふ。妹も、もう少し、しつかりしてほしいと思ふ。



僕の言い分を聞いてくれたら……

男子

ぼくは、おかあさんと、そうじのことについて対立しました。それは、ぼくが、へやを二十日ぐらいかたづけなかったことからです。

ある日、ぼくが学校から帰つてくると、おかあさんがぼくのへやをかたづけしていました。へやがきれいになったことは確かだけれど、ごみ箱を見ると、ぼくがだいじにしていた物がすてられていました。

それで、ぼくはおかあさんに、

「自分のへやは自分でかたづける。」

といったが、おかあさんは聞きいれてくれませんでした。それで、とうとう、ぼくの大事にしていた物がすてられるはめになったのです。その事で、ぼくとおかあさんは、対立することになったのです。

おかあさんのいい分は、確かにまちがってはいないけれど、ぼくの大事にしているものを、ぼくに聞かないでなんでもかんでもすててしまうということは、ぼくにはなんだかよくわかりません。でも、ぼくが今まで自分の部屋をかたづけなかったことは、確かに悪いことは悪いけれど、もつとおかあさんも、ぼくのいい分を聞いてくれたら、こんな対立はしなかったと思う。

今も、ぼくはこの事が、なんだかよくわからないのです。

がらくたでも、僕には大切なんです 男子

この前のことである。学校で自動車の計器をもらったことがあった。そして、それをもらった日に、学校から帰ってきて、友だちの家で分解をして、家に持って帰ると、母が、

「そんながらくた、どこかに捨ててしまいなさい！」といった。きつと母は、そのがらくたが油くさく、きたならしい感じがしたのでそう思ったのだろうと思う。

しかし、ぼくは、そのがらくたを捨ててしまわずに、はこに入れてしまっただけだった。

ぼくは、がらくたをいじるのがとても好きである。よく家でもいじっているが、すぐ捨てられてしまう。大事な物を捨てられるのは、とてもくやしい。だが、母は、がらくたを大事なものとしてみてくれないのである。ぼくのゆいいつのたのしみの、がらくたいじりをしや断されるということは、とても、つまらない感じがする。

がらくたをいじることによって、機械の構造がわかり、また、組み立て直す。それによって頭を使うので

ためになると思う。だから、がらくたをすてないようにしてほしいと思う。



自由な時間を作ってみたい

男子

ぼくは、いろいろな所で遊びたいな、ということ
で、母と小さな戦争が起こった。

「遠いところと、危ないところへは行ってはだめよ。」
と母は言う。母は、もしぼくに、なにか事故があるとい
けないと思うからかな、とぼくは思う。ぼくとして
は、もう大きくなったから、少しくらい遠いところへ
行って、いろいろな経験をしたいと思う。それと、大
きくなったから、少しくらい危いところだと、自分で
はんだんできるからだと思う。

母は、

「遊んでばかりいないで、少しでも勉強しなさいよ。」
と言う。ぼくは、そんなに勉強したら体がもたないと思
う。

ぼくは、自由な時間を作ってみたいと思う。勉強ば
かりやっていないで、一日くらい、一人でいろいろな
ところへ歩いていきたい。ぼくは、そのほうが、勉強
をやるより大切だと思う。

いろいろと歩いていると、ある店の様子だとか、い

ろいろな人々は、どのように生活をしているのか、だ
とか、今、自分が歩いているところはどこだろうな
と案内板を見たりして、その地形を覚えるからだ。そ
れと、いろいろな人と知り合い、人々との交流がで
るからだ。

だから、

「いろいろなところで遊びたいな。」
と思う。



ほんの少しの間、目をつむって

女子

私は、母と、しょっちゅう対立する。このごろは、洋服のことで、意見がくいちがつている。私は、いつも、おとなっぽい服をねだるのです。でも、母はいつも、子どもはそんな服なまいきです、と、いつも、私のいうことをこぼみます。

私は、もうすぐ中学です。それに、女の子です。おとなっぽい洋服が着たいとか、おしゃれがしたいなと思うことは、まちがっていないと思います。

それに、私の性質は、いつも新しいものをもとめにくせに、すぐあきてしまったり、それがバカバカしいことだと理解しても、そのものをふりすててしまうことがあるのです。だから、きつと私だつて、今は、洋服はおとなっぽいのがよいけれど、そのうちあきて、ちゃんと年代にあった服を着るのだらうと思います。だから、ほんの少しの間、私の着る服を、とやかく言わないでほしいのです。

私に子どもらしい服を着せたい母の気持ちは、よくわかります。でも、私は、むりにでもせのびして、お

となつぽくしてみたいのです。なぜお母さんは、わかつてくれないのでしょうか、娘の気持ちを。

● いかがだったでしょうか？

大人からみれば、子ども独特の発想や捉え方とうつりがちですが、どの子からも心の力強さとたくましさを感じることができるとは、ないでしょうか。

次号では、日ごろ子どもたちとかかわりの多い、先生方の意見を掲載します。

(編集部)

